
雨降りの月夜に【改訂版】

トマト男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降りの月夜に【改訂版】

【Nコード】

N0284D

【作者名】

トマト男爵

【あらすじ】

おばあちゃんが言っていた　雨が降っているのに、お月さんがよく見える夜は気をつけるんだよ。『こっち側』にいない人まで見えてしまうからね　そして、そんな夜に、彼女に出会ってしまったんだ

青紫の月夜に（前書き）

この作品は改訂版です。一部加筆修正しましたので、同タイトルのものと、一部内容等が変わっています。『おや？』と思う点もあるかもしれませんが、そこはそつとスルーして下さいませ（笑）さらに、この作品はちつとも怖くありません。ご了承ください。

青紫の月夜に

雨が降ってるのに、お月さんがよく見える夜は、出会う人へ気をつけるんだよ…『こつち側』にいない人も見えてしまうからねよく、おばあちゃんが言ってたっけ…

でも、生まれてから十九年の間、一度もそんな夜はこなかった。だから、そんな言葉もすっかり忘れてたんだ

もう7月なのに、朝から降り続けている雨のせいでなんか肌寒い。止まないのかな、なんて思って夜空を見上げたら、青紫の月が綺麗で、顔が濡れるのも構わずに月を見続けていたんだ…

終電間近の駅前。電車をあきらめた人たちはタクシー乗り場に並んでる。僕みたいに歩いて帰れる人たちは、皆足早に去っていく。

僕は、この雨の陰鬱さに歩くのも嫌になって、このまま帰る気にもなれなくて、月を見ていたんだ…実際、歩く度に濡れた靴が気持ち悪かったし…そんな時に、声を掛けられたんだ。

「風邪、ひいちゃうよ？」

澄んだ、というよりも、透明感のある声。雨の降る音に混じらないその声が僕の意識を彼女に向けさせたんだ。

「えっ？あぁ、月が綺麗だったから、つい…」

何故か、自然に答える僕。知らない人、だよな…？どうしてだろう？いつもなら返事なんかしないのに。

彼女は、それ以上話しかける事はなく、ただ僕の横に立って、空を見上げてる。僕よりも少し年上かな？かなりの美人。っていうか、すごく、『キレイ』なひと…そう、『綺麗』じゃなくて『キレイ』。雑誌やテレビに出てるような『観せる』顔じゃなくて『魅せる』顔。僕は、ただ見惚れてた。もう月なんかどうでもよくなってた。このまま彼女を見つめていたかった…

「キレイだね…」

言ってしまうってから、自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

「ホントに綺麗だね、あんな色の月、初めて見た。」

「どうやら、僕の言葉を勘違いしてくれたらしい。それはそれで助かったような、何ていうか…それから、どれ位だろう？僕たちは黙ったまま、並んで月を見ていたんだ…」

「マキ。」

「えっ？」

「私の名前。マキっていうの。キミは？」

「唐突な自己紹介。僕は少し困惑しながら」

「タクミっていいいます。」

「マキが、小さく笑った。」

「何でいきなり敬語になるかなあ？」

「だって、僕よりも年上じゃん…」

「マキには、僕の心の中のツツコミが分かったのか、頷きながら笑って言った。」

「多分、正解。私は23歳。タクミはまだハタチ前だよな？」

「うっ、鋭い…でも、悪い気はしないな。あ、その笑顔ヤバいな…」

「それマジで惚れちゃうよ…なんて、考えこんでしまう僕。」

「うわわっ!？」

「いきなり、マキの顔が目の前に迫っていた。」

「タ〜ク〜ミくん？顔が真っ赤だぞ〜？」

「甘い息がかかる距離で、いたずらっぽい笑顔。こんなの、反則だよ…これで恋に落ちなかつたら、ホモ確定だって…」

「あれ？でも…なんか懐かしい感じがするな？うーん、思い出せないや…はっ！今はそれどころじゃないよね…」

「なんかモヤモヤしたまま、僕は月を見てた。だんだん色が濃くなつていく月。吸い込まれそうな青紫」

「月の光と雨の中で、突然思い出したんだ。さっきの、顔を覗きこむの、姉さんの癖だった…でも、姉さんはもう」

「ねえ、歩かない？」

「突然マキがそう言って、返事も聞かずに歩きだす。反射的に僕も慌」

てて後に続く。やがて、ふたつの傘が並ぶと。

「変わったなあ、この辺りも…少し前までは街灯あかりも無かったのに」
マキは僕に、というよりも自分に向かつて呟いた。

でもこの道、かなり前から街灯あった筈だけど…一体いつの話だろう…？

「ねえ、タクミ。この公園、知ってる？」

暫らく歩いて、右側に見える公園を見てマキが訊ねた。勿論知ってる。ここは、姉さんが　って、あれ？この公園、少し前に無くなってマンションになったよね？何でここにあるんだろう…？

「私、一緒によく来てたんだ…」

遠い目をして話すマキ。誰だろう…少なくとも、僕じゃない、誰か。あれ？何で胸が痛いんだろ？僕…

「ん？ひよつとして、ヤキモチかな？そんな顔しないでよ、相手は小さな男の子なんだから。」

くすくすと笑いながら、辺りを見渡すマキ。人気の無い、夜の公園。少し弱くなった雨音と、ふたつの足音だけが聞こえる。

僕も、この公園には思い出がある。温かい思い出と、忘れたくても忘れられない…：小さな、ホントに小さな頃によく来てた。

そう、一緒に…

『今は思い出しちゃいけない。今は……』

そんな声が頭の中に響く。どうして？とつても大切な事なのに…？あ、何か頭が痛くなってきた…：どうしよう、立ってられない…

頭を押さえてしゃがみこんだ僕に構わず、マキは喋り続けている。

「すぐ近くに住んでたから、よく遊びに来たんだ…：その子の手をひいて、私もまだ小さかったんだ」

顔は僕に向いてるけど、その瞳には僕を映していないマキ。ずっと、頭が軽くなった。僕は立ち上がって聞いてみた。

「その男の子、あ、もう男の人か…：今はどうしてるの？」

何気ない僕の質問に、マキの表情が曇るのが分かった…：僕、まずい事聞いちゃったのかなあ…？

「今は…眠ってる。」

それでもマキは答えてくれた。

「…まあ、こんな夜中なら、普通は寝てるよね。」

そんな僕の言葉に、マキは弱々しくかぶりを振った。

「違うの、起きないの、ずっと…」

え？それって？

あれ？また頭の奥が痛くなってきた…

「あ、月が見えなくなりそうだよ…」

不意にマキが空を見上げて呟いた。何か焦ってるみたい…？

「時間、あんまり無いなあ。タクミ、思い出して？私を、そしてあ

なたを…」

え？思い出す…？マキを？困って、月を見上げたら、月の色が変わ

っていた。真っ赤だ。血のような…目の前が真っ赤になる。あの時

みたいに…あの時…？

「ねえさん…」

かすれた声と共に涙が流れた。小さな頃に死んだ姉。近所の公園で

事故にあって…そう、僕をかばって、血の海の中で、それでも笑っ

て…

『タクちゃん、どこも痛くない？』

って言ってくれて…

「忘れる筈無いよ、真雪ねえさん…」

『まゆき』って言えなくて自分のことを『マキ』って呼んでた姉さ

ん。あの頃はまだ『姉ちゃん』て呼んでたよね、僕……

公園から帰る時にトラックにはねられそうになって、ねえちゃんが

…僕をかばって…

「ずっと居たの？この公園に、ずっと…？」

マキ…姉さんは笑って頷いた。

「うん。幽霊も大人になれるんだって思わなかったよ。不思議だよ

ね？」

そうか、姉さんはずっと僕を見ていたんだ。あの日から、ずっと、

ここで…

下から顔を見上げてた時に感じた懐かしさ。やっぱり姉さんの…ん？それはそうと…

「僕を”思い出すって云われてもなあ？姉さん、どういう事？」
また曇る表情。一体、僕の何を思い出せっていうのかなあ？

「さつき言つたよね？起きないって…」

僕が？起きない？ずっと？それって変だよ、だって僕此処にいるし…
そう思いながら足元を見たら、気付いちやった。僕と姉さんには影が無い。つまりこれって…

「僕も、“こつち側”じゃないんだ…？」

「半分正解。もう少し思い出してみて…？」

えっ？確か、バイトの帰り道で、公園のあつた辺りで…とぼしてた車に…！？

「そう。だけど、まだ身体は生きてるの。今ならまだ戻れるの。」

そうか、姉さんは僕を迎えに来て…？それとも『こつち側』に戻しに来た？どつちなんだろう？

「どつちとも言えない。タクミの気持ち次第かな？」

それって、すごく困る答えだよな…

「そう？まだやりたい事や心残りがあんなら、戻ればいいし、もういいや、と思うなら一緒に逝く事になるよ…」

もし、戻るとしたら…？

「戻るなら、私だけ逝くから、此処で最後の、ホントのお別れになるね。」

悲しい筈なのに、笑顔で話している。僕は、悲しい笑顔というものを初めて見た…

「皆は今どうしてるかな？僕の近くに…？」

母さんや父さんはどうしてるだろう？ふと気になったんだ…

「見に行ってみる？」

その声に頷きながら、僕は空気が凍りつくような感覚を感じた。

何か嫌な予感がし始めていたけど、姉さんと一緒なら平気な気がし

た。昔からそうだった。姉さんがいれば安心だった

「じゃあ、行くよ?」

姉さんの声に合わせて、周りの景色がぼやけて溶けていく…溶けて
交ざって、白くなる…白く、白く

青紫の月夜に（後書き）

如何でしたでしょうか？出来るだけ良い『加筆修正』が出来ていればいいのですが：次話では、本編を一度離れて、回想シーン等を入れる予定です。少し間が開くかもしれませんが、お付き合い下さいませm（）m

紅紫の月夜に（前書き）

すいません……始めに謝ります。内容が全くの別物になります（苦笑）しかも恐怖系になりつつあります。ご了承ください。

紅紫の月夜に

ちゃん…

タクちゃん…

あ、誰か呼んでる…？この声は…

「おねえちゃん…？」

あれ…？身体のおちこちが痛い…痛いよ…

「大…丈夫？タクちゃん、ケガ…してない…？」

何か、おねえちゃん変だよ…あつ…！

「おねえちゃん…血が出てるよ…ケガしてるの、ボクじゃなくて

おねえちゃんだよ！？」

おねえちゃんの身体のおちこちから血が流れてる…このままじゃお

ねえちゃん死んじゃうよ！

「おねえちゃんは…大丈夫だよ…タクちゃん、ごめんね…おねえ

ちゃん、タクちゃんを突飛ばしちゃった…いた…かったよね…」

おねえちゃんは、それだけ言って目を閉じた。それから、おねえち

ゃんは目を開ける事は無くて

『弟さんをかばって、車にひかれたんですって』

『車の運転手って、わき見運転だったらしいわよ』

近所のおばちゃん達がいろいろ言ってる中で、おねえちゃんのお葬

式をやってる…。皆はおねえちゃんの写真を見て泣いてる。雨が降

ってきてたけど、月が出てた。

「タクミ、こっちにおいで…こっちに」

おばあちゃんがボクを呼んだ。何だろう？

「なに？どうしたの、おばあちゃん？」

ボクは、おばあちゃんが手を振る方に走って行ったんだ。

「おねえちゃんがいるよ。タクミのケガが心配なんだって…」

え？おばあちゃん何言ってるの？おねえちゃんはあるよ？あつちにいるよ？

あつちの箱の中で寝てるんだよ？

「ここにいるよ。タクミには…見えないみたいだけどね」
変なおばあちゃん…そう思っ、戻ろうとしたら。

《タクちゃん…聞こえるかなあ…?》

え?おねえちゃん!?どうして!?

《タクちゃん、ケガしたところ、痛くない?》

「う、うん、痛くないよ」

《そう、よかった…おねえちゃん、これからはずっとタクちゃんを見てるからね》

最後の方は声が小さくなって…おねえちゃん、遠くに行っちゃったみたいで

「おねえちゃん、行っちゃだよ…!」

ボクは泣きながら、声のした方を見てたんだ。

『あら、タクミちゃん、どうしたの?』

親戚のおばあちゃんが声を掛けてきた時に、気がついたんだ。おばあちゃんも、半年前に死んじゃってたんだよね…

《タクミ、雨が降ってるのに、お月さんがよく見える夜は、出会う人に気をつけるんだよ…『こっち側』にいない人も見えてしまうからね》

おばあちゃんの声がして、それつきり静かになっちゃった

「おばあちゃん!?おばあちゃんも行っちゃうの!?皆、ボクを置いて行かないでよ…皆いなくなっちゃうのいやだよ」

それからボクは、一晩中泣いていたんだ

そっ、あの夜も、雨降りなのに月が出ていたっけ…お母さん達に話したけど、誰も信じてくれなかった。あ、一人だけ信じてくれた人がいたな…遠い親戚のおじさん…その人が言ってたんだ。

「人の魂は、いや、心は死んだ後も大切な人のそばに残っているんだよ…」
「思い出」
「なんか形を変えて」

あの頃のボクには、その言葉の意味が分からなかったけど、今は…

白い、どこまでも白い光の中で、僕は過去の記憶をたどっていた。白い光の中に、月だけが見えている…あれ?色が…?青紫だ

つた月が、紅紫色になっている……？血のような色、何か嫌な光……
《気をつけるんだよ……》

おばあちゃんの声が頭の中で繰り返される。気をつける？どうしてだろう……？何か大切なことを忘れているような気がする

不安にかられた僕は、姉さんの姿を探した。誰かに傍に居て欲しかった……怖くて、そう、とても怖くて……なのに、姉さんの姿は何処にも見当たらない。

「姉さ……」

姉さんと呼ばうとした時にふと、僕は気がついた。ずっと心の片隅にあつた疑惑……彼女は本当に、僕の姉さん、まゆきだろうか？
思えば、一度も、彼女は自分が『姉』だとは言ってない。何か、僕の記憶に合わせて話していたような……

疑いつてやつは、一度うまれると、際限無く膨らんでいく。段々と姉さんに対する恐怖が僕を包み込んでいくのが分かる

『タクミ、どうしたの？何か顔が蒼いけど……？』

不意に掛かった声に、僕は飛び上がりそうになった。いつのまにか、後ろにはマキがいた。

「急に姿が見えなくなったから、迷子になったような気分になっちゃったよ」

怪しまれちゃまずい。取り敢えずごまかす。

「一瞬、月が見えなくなったから……雲がかかったからだと思っ……やっぱり、月が出てないとタクミには私が見えないみたいね」

マキの返事は、納得してもいいと思えたから、取り敢えず頷く。

「思い出してんだ……」

唐突な僕の言葉に、マキは首をかしげる。

「あの夜の……姉さんの葬式の夜のコトを……」

マキは特に反応は見せなかった。何か、聞き流すような顔つきで、僕の前に立つと口を開いた。

「私は忘れたよ……自分の葬式なんて思い出したくもないな……」
どうして？あの夜に、ずっと僕を見ていてくれるって言ってたのも

忘れたの？

「じゃあ、あの夜に言ってくれたコトも？」

僕は、マキが本当にまゆき姉さんか確かめようと思った。

「覚えているよ…確か、タクミ、元気でね…って言ったよね？」

違う。やっぱりこの人は姉さんじゃない。僕は確信した。

「…誰？」

僕はマキの目を見つめて聞いた。マキはきょとんとした顔をしたが、直ぐに笑った。

「私はマキ、タクミの姉だよ。どうしたの、突然？」

そう、決定的なのが僕を呼ぶ時の呼び方。姉さんは一度だって僕のことを

「タクミ」と呼んだ事が無い。

「姉さんは僕を“タクミ”って呼ばないよ…マキ、キミは本当は誰なの？」

マキの目付きが、変わった…それと同時に、周りの空気が変わる。かすかに歪んで、靄がかかったような灰色の風が吹き始める…

『お詫びと』『お知らせ』

『連載中止のお詫び』と『作品についてのお知らせ』皆様、ご機嫌如何でしょうか。トマト男爵です。

突然ではございますが、この度、当小説、『雨降りの月夜に（改訂版）』の連載を、中止させて頂く事をお知らせさせて頂きたいと思えます。

どういう事だ？と思われる方がおられるかもしれませんが…ですから、この場をお借りして、説明させていただきます。

まず、中止の理由ですが、執筆を続けていく内に、この作品は、もはや改訂版と呼べる物では無くなる程に内容が変わってしまいました。

改訂版とは、加筆、修正が入って、矛盾や説明不足な部分を解消させていくものであり、本筋には、やはり変更が無いべきではないかとの結論に至った訳です。訳ですが、『これは違う話になったから書くのも止めちまえ』的な結論では無く、もったきちんとした独立した物語にしまったという事です。

そこで、改めて背景、人物等も起こし直して、『雨降りの月夜に』のシリーズ的作品として構築し直す事を決めました。

誠に身勝手甚だしい話ですが、どうか皆様のご理解を頂きたいと思えます。

現在、新たに世界観等を踏まえた作品を構築中です。こちらが形になりましたらその時は、どうか皆様お付き合いしていただきたいと思えます。

誠に申し訳ありません。

もし、この作品をお気に召して頂けた方がおられましたら、本当にごめんなさい。でも、この話はこれでおしまいにはなりません。要は、『改訂版』では無い、オリジナルの作品として完成させたいという事ですので、もう少しだけお待ちください。必ず、オリジナル

にして良かったと思って頂けるように頑張って書きますので…
以上、トマト男爵でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284d/>

雨降りの月夜に【改訂版】

2010年10月9日06時13分発行